

# 尾岱沼におけるオオハクチョウの 標識放鳥とその観察

'77・5・14 別海町立野付中学校 三浦二郎

## 1. はじめに

尾岱沼のオオハクチョウの越冬群は、その数の多いことは、また永年の給餌等の保護活動が効を奏して人によくなれていることについて、他の渡来地と比較して断然群をぬいている状況である。私もじばじばその観察のため尾岱沼に足を運んだが、遠距離地からの観察行であったので、その観察は断片的で資料的価値は殆どなかった。幸いに、'75年春の異動で尾岱沼に所在する野付中学校に転動した。野付中学校は、かつて異常寒波の年、湖面が結氷し採餌不能になり、寒さと飢えで斃死鳥が続出した際、献身的な救護活動を行ない、愛鳥校として名を高めた歴史がある。しかし、その後冬の気候も安定し、特に救護に手をかさねばならないような状況も発生することなく、また給餌についても民間人に委嘱され、生徒の手から離れたということもあって、学校として白鳥保護の活動をするのは次第に少なくなった。僅かに「日本白鳥の会」の渡来数調査に協力するといった程度であった。また、生徒の活動の限界としてはそれで充分なことでもあると考えられる。しかし反面、ただ数を数えるだけというのも、根気強さだけが要求されることで、生徒の興味や意欲を喚起するものでないことも確かであろうと思われた。

そこで'75年秋から'77年春にかけては、私なりに観察し、渡来・越冬・渡去の概要を把握した。この年の観察において、興味ある事実を知った。というのは、越冬群のうち200羽前後が、尾岱沼港から春別手前の前浜に居ついており、崖下の湧水を飲み、また漁家が投ずる魚のアラを競って食べていたことである。越冬主群が集結する春別川河口までは4kmほどの道のりがあり、生徒に徒歩で観察に行かせることはなかなか困難であるが、数は少なくともこの前浜越冬群の観察は、なかなか興味のある事実を発見できる可能性があると考えられた。

そこで、昭和51年度は必須クラブに「自然観察クラブ」を創設し、そのクラブでは冬期間、オオハクチョウの観察を継続する計画をたてた。ところが12月一杯はトビカリ以北寄りの沼奥に集結し採餌していて、前浜には姿を見せず、沼奥が凍結してトビカリ以南に移動したとたん、連日の異常寒波のため湖面は全面凍結し、僅かに開水面の残る春別川河口部に集結するようになり、第3学期が始まる頃には前浜に1羽も飛来することなく、クラブの観察計画はついに実施することができなくなったのである。従って私一人が時間の合間に春別川河口部まで車で走ってカウントし記録を続けざるを得なかったのである。異常寒波時におけるオオハクチョウ群の行動について、地元にいる者でなければ得られない貴重な知恵の蓄積ができたが、このことについては別の所で改めて発表するが、その観察継続中に、2月1日初めて緑色の標識を首にまいた個体を発見したのである。この個体は〔表1〕に示す通り、'75年3月、青森県小湊で放鳥されたものである。この観察によって標識鳥の観察が意義深いものであることを強く感じたのである。以下その後間もなく尾岱沼で実施された標識放鳥に関連して述べてみたい。

## 2. 今までの標識放鳥（山階鳥類研究所提供資料による）

〔表1 '74～'76のオオハクチョウ標識放鳥〕

首環番号	放鳥年月日・場所	確認年月日・場所
1C01	76.3.14 風蓮湖 走古丹	
1C02	76.3.15 霧沸湖	76.3.29～4.1 霧沸湖
1C03	74.3.12 小湊	
1C04	75.3.23 小湊	75.12.14 小湊
1C05	75.3.23 小湊	76.1.4～16 尾岱沼 1.27 小湊
1C06	欠番	
1C07	75.3.23 小湊	75.12.10 小湊
1C08	75.3.23 小湊	75.12.10 小湊
1C09	75.3.23 小湊	75.12.8～16 屈斜路 12.20～22 小湊
1C10	76.3.15 霧沸湖	76.3.29～4.19 霧沸湖
1C11	76.3.15 霧沸湖	76.3.29～4.29 霧沸湖
1C12	76.3.15 霧沸湖	76.3.29～4.29 霧沸湖
1C13	76.3.18 小湊	76.4.4 屈斜路
1C14	76.3.18 小湊	76.4.1 小湊
1C15	76.3.18 小湊	76.4.1 小湊

※1・4～1・16尾岱沼と記したが、断続観察である。

で、標識放鳥はなかなか実施されなかった。観光客のいたずらか何かであろうと思われる赤いリボン  
を首に巻いた個体や、奇型と思われる首の曲った個体などが稀に見つかるオオハクチョウがいて、全  
国の鳥仲間によびかけてその確認記録をまとめるということもあったが、データとしては微々たる  
ものにしかならなかったようだ。

しかし'74年春から、大型の首環をはめでの調査（このプラスチック製首環もアメリカ製）が始め  
られた。昨年までの放鳥記録は〔表1〕の通りであるが、このうち1C05の個体は昨年1月4日に尾  
岱沼で発見され、続いて1月9日～16日まで確認されており、このことは朝日新聞がスクープして  
北海道版記事として掲載した。しかし、私はついに観察の機会に恵まれなかった。そして今年になっ  
て2月1日、別の個体1C08を確認した。初めてなので番号を逆に読みとって80JIと思ったが、高  
田氏に連絡した処、読み違いが判明したのである。

## 3. 尾岱沼における標識放鳥

表1のトップ番号、1C01は、風蓮湖走古丹で例年3月14日に放鳥された幼鳥である。実はこの

鳥の渡りの研究には標識調査は極めて有  
効で、日本でも戦前から行なわれていたが  
観測網が整備されていなかったため、その  
データは断片的で、渡りの経路の解明ま  
ではなかなか至らなかった。

戦後は、山階鳥研が民間研究として委嘱  
されて実施したが、当時アルミ製の足環は  
香港製のものしかなく HONGKONG と刻  
字されていたので、日本で放鳥されたもの  
と思われず、せっかく回収されたものでも  
そのまま放棄されデータに記録されずに  
葬られたケースがかなりあったようだ。

環境庁が設置されてからは、標識調査も  
軌道にのり（それでも山階鳥研への委託業  
務として行われている）観測ステーショ  
ンも整備され、今まで謎であった各種の渡り  
鳥の経路等について逐次解明されつゝある。

しかし、アルミ足環による標識調査では  
小・中型鳥については再捕確認（主として  
カスミ網による）が可能であるが、大型鳥  
特にその殆どの種類が天然記念物または特  
別天然記念物に指定され、再捕確認が困難

時、根室の高田勝氏から通報があり、山階鳥研から吉井正氏他の一行がオオハクチョウの標識つけに出かけたので現地で落ち合わないかということなので、私も出向いたのである。

しかし、吾々が現地についた時は既に遅く、辛うじて幼鳥1羽を捕獲しただけで潮回りが悪く捕獲条件がよくないと判断し屈斜路に移動したあとだった。(この日、走古丹地区でのタンチョウ渡来を確認)

表1の記録によると、屈斜路でも捕獲は成功しなかったようだ。更にあとから聞いたところによると、翌3月15日に尾岱沼にも来たが、もともとその年は暖冬で経過し、湖岸まで凍結しなかったのに加え、2月中旬の白鳥まつりのあとは、春別川河口域から離れて沖合に主群が出てしまっており、3月中旬は沼奥部の開氷帯に採餌場を移動してしまい、一行は尾岱沼から空しく去ったのだそうだ。直ちに隣湖湖に移動し、02及び10～12の4個体の標識放鳥に成功したわけである。

前記1C08の個体発見してからは、今冬の異常寒波によるオオハクチョウの空腹からくる物乞い態度からして、捕獲は容易だし、尾岱沼は標識放鳥の条件はよいのだがなあと考えていた矢先、東京の山階鳥研から状況の問合せの電話が入ったのである。今年の場合成功間違いのない旨回答し、来沼を待った。

3月5日、青森県小湊での標識作業を了えた黒沢収・佐藤文男の両氏が来沼された。直ちに役場観光係・自然保護監視員・現地白鳥を守る会等を交えて作業実施の打合せをした。翌6日は日曜日で、観光客が多数来ると予想されるので捕獲は見合せようということになり、ハクチョウ群の動きを観察することになった。時あたかも異常寒波のため採餌不能で斃死鳥が続出しており、生きているものも観光客の投げ与える餌で辛うじて生命を保っているという惨たんたる状況であった。潜水動物性採餌型のホオジロガモ・ビロードキンクロ等は、商工青年会等の労力奉仕であけた僅かな開氷水域(当時50m平方程度)では採る餌もなくバタバタと餓死し、そのやせ細った死体にはカラスさえ見向きもしないという有様だった。

そこで、捕獲は容易であろうが、体力の弱い幼鳥は捕獲せず、できるだけ体格のよい成鳥だけを選ぶという方針が立てられた。そして7日に9羽、8日に6羽、計15羽が捕獲された。私は捕獲の現場に立ち会えなかったが、餌をまいて集った中から、前記のような方針のもとに、素手で首をつかまえて捕獲した由である。あたかもピケ隊に対し警官隊がよく使う手のゴボウ抜きと同じだったと、捕獲に当たった両氏もいい気持のものでなかったと後で述懐されていた。

さて、捕獲したオオハクチョウは、直ちに体重測定、各部位測定、性別判断をし、更にオオハクチョウの人相?ともいえる嘴部の写真撮影をしながら、首環と、首環と同じ番号の足環をバンドではり合わせ、更に環境庁の一連のアルミバンドをもう一方の脚にはめて、再び放鳥するのである。

この一連の作業は、なかなか手間のかかる作業で、7日は両氏に三浦が手伝って早朝から昼すぎまでかかり、翌8日は野付小学校大沼好夫氏が手伝って同じ位かかったとの事である。

この作業を通してわかったことのうち、特に♂♀の体格がはっきり違うということである。黒沢・佐藤両氏も、このことについては今回はじめて確認できたことのようなのである。というのは、体力の落ちている個体には標識をつけないという方針であったため、7日捕獲した9羽のうち、体重の軽い2羽は保留にしておき、若し、どうしても標識をつける必要が生じたならばということで、袋をかぶせのまま放置していたのである。ところが他の7羽について作業を進め、性別判定をしたところ、すべてがペニス(14mm程度)もちの♂であることがわかったのである。そこで保留していた2羽の検体

をしてみると、2羽とも排卵孔のある♀であった。次に表2で、今回の15羽についての平均測定値を掲げるが、その差はかなり歴然としている。

〔表2 オオハクチョウの♂♀の体格のちがい〕

※体重は飢えのため減少している。

性別	体重 (g)	翼長 (mm)	尾長 (mm)	附長 (mm)	嘴峰長 (mm)
♂	8.6	594	256	122	108.5
♀	7.2	573	243	119	99.1

体型から見ても♂は肩が張った感じで、♀は全体的にほっそりしている。

#### 4. 標識オオハクチョウの確認観察

※08は1C08の略番号である

月日	カウント総数	08	11	29	30	31	32	33	34	35	♀ 36	♀ 37	38	39	40	♀ 41	42	♀ 43	
3.12	1,375	○		○	○	○		○	○			○	○		○				
3.13	3,270	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○			○	
3.16	4,613					○		○	○		○		○		○			○	
3.17	4,690				○	○		○	○			○	○					○	
3.18	3,883				○	○		○	○		○	○			○				
3.20	4,776	○			○	○		○	○		○	○			○			○	
3.21	4,932	○			○	○		○	○	○	○	○							
3.22	5,684	○		○		○		○	○			○							
3.23	5,139			○		○			○			○			○				
3.27	4,545		○	○				○											
3.28	3,787	○		○	○	○			○	○	○								
3.29	3,063			○				○			○	○			○				
3.30	2,585																		
4. 1	春別川河口のみ 366										○	○							
4. 2	250			○								○							

4月3日以降は主群の移動と共に離岸し観察困難となったが、4月中旬までは緑標識が発見された。